

2 課

7月11日

人を引きつけるあかし人 ——個人的なあかしの力



安息日午後 7月4日

暗唱聖句

わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない。(使徒行伝 4：20、口語訳)

わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。(使徒言行録 4：20、新共同訳)

今週の聖句

マルコ 5：15～20、マルコ 16：1～11、使徒言行録 4：1～20、1ヨハネ 1：1～3、ガラテヤ 2：20、使徒言行録 26：1～32

今週のテーマ

個人的なあかしには、並外れた力があります。私たちの心がキリストの愛によって温められ、私たちが彼の恵みによって変えられるとき、彼について語るべきすばらしいことが私たちにはあります。イエスがだれかのためになさったことを伝えるのと、彼が私たちのために個人的にしてくださったことを伝えるのでは、大違いです。

個人的な体験に反論することは困難です。人々はあなたの神学や聖句の理解について議論したり、宗教全般をあざ笑ったりすることはできるかもしれませんが。しかしだれかが、「昔、私は絶望していましたが、今は希望があるんです。かつては罪悪感でいっぱいでしたが、今は平安なんです。以前は生きる目的がなかったのに、今は目的があるのです」と言えるとしたら、疑り深い人でも福音の力に衝撃を受けます。

ダマスコ途上のパウロのように劇的な回心を経験する人もいますが、大抵の場合、回心が起こるのは、その人がイエスの大切さを徐々に認識し、イエスの驚くべき恵みを深く味わい、イエスが無償で与えてくださる救いをこの上ないほど感謝するにつれてです。キリストは私たちの生き方を根本的に変えてくださいます。世界が切実に必要とし、心から望んでいるのは、このようなあかしなのです。

問1 マルコ5：15～20を読んでください。イエスは、その男を手元に置くことによって、彼が見いだしたばかりの信仰の中で彼を育てることもおできになりました。しかしそうせずに、家族や友人たちにあかしをさせるため、彼をデカポリス地方へ遣わされました。なぜそうされたのだと、あなたは思いますか。

「デカポリス」という言葉は、二つの言葉から成り立っています。「10」を意味する「デカ」と、「町」を意味する「ポリス」です。デカポリス地方は、紀元1世紀にガリラヤ湖の岸に沿って10の町があった地域でした。これらの町は、共通の言語と文化で結びついていました。悪霊に取りつかれた男は、その地域の多くの人から知られていました。気まぐれな暴力で、彼が人々を心底おびえさせていたからです。イエスはその男の内に、何か良いものを心から望んでいるのをご覧になり、彼を苦しめていた悪霊から奇跡的に解放なさいました。

町の人たちは、悪霊どもが豚の群れに取りつくことをイエスがお許しになり、豚の群れが崖を下って湖になだれ込んだと聞き、何が起きているのかを見ようと外に出てきました。「彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているを見て、恐ろしくなった」(マコ5：15)と、マルコによる福音書は記録しています。男は、肉体的にも、精神的にも、感情的にも、霊的にも、健康を取り戻しました。ここでの福音の核心部分は、罪によって破壊された人を、キリストが創造されたときの健康な状態に戻すことです。

デカポリス地方全体に彼のあかしを伝えることのできる人として、このつくり変えられた元悪霊つきの男以上にふさわしい人物がいるでしょうか。「キリストの証人として、われわれは、知っていること、自分が見、聞き、感じたことを語るのである。もし1歩1歩イエスに従ってきているならば、われわれは、イエスがわれわれをみちびかれた道について何か要点にふれたことを語るができるのである。イエスの約束を試みて、その約束が真実であったことを語るができる。キリストの恵みについて知ったことをあかしすることができる。これこそ主が求めておられるあかしであって、このあかしが欠けているために、世の人々は滅びつつあるのである」(『希望への光』845ページ、『各時代の希望』中巻66ページ)。神は、恵みによって変えられた、思いも寄らぬあかし人をしばしば用いて、私たちの世界に変化をもたらされるのです。

あなたの回心の物語は、どのようなものですか。いかに信仰に導かれたのかについて、あなたは何を語りますか。まだ改心していない人で、あなたの経験から恩恵を受けられる人に、あなたは何を提供できるでしょうか。

日曜日の朝早く、2人のマリアがキリストの墓へ急いで向かっていました。何かをキリストにお願いしようとしていたのではありません。死んだ人が何を与えられるというのでしょうか。彼女たちがキリストを最後に見たとき、彼の体は血まみれで、傷だらけでした。十字架の光景が、2人の心に深く刻み込まれていました。彼女たちは今、ただ自分の務めを果たそうとしていたのです。悲しいことに、墓へ向かったのは、キリストの遺体に香料を塗る（防腐処置をする）ためでした。絶望の闇の中にある2人の人生を、落胆の暗い陰が覆っていました。未来は不確かで、ほとんど何も期待できませんでした。

墓に着くなり、そこが空であることに気づいて、彼女たちは驚きます。その復活の朝の出来事を、マタイは次のように記録しています——「天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ』」（マタ 28：5、6）。

彼女たちの心は、今や喜びではちきれそうです。悲しみの黒い雲は、復活の朝の夜明けの光の中へ消えていきました。悲しみの夜は明けたのです。喜びが彼女たちの顔を美しく飾り、嘆きの涙は喜びの歌に置き換わりました。

問2 マルコ 16：1～11 を読んでください。キリストが死者の中から復活されたことを知ったとき、マリアはどのような反応を示しましたか。

復活されたキリストにお会いしたあと、マリアはこのことを伝えるために走りまわりました。良い知らせは分かち合うためにあります。彼女は黙っていられませんでした。キリストは生きておられる！ 彼の墓は空でした。そのことを世界に知らせなければなりません。人生という道の途上で、私たちも復活されたキリストにお会いしたあと、そのことを伝えるために走らなければなりません。なぜなら、良い知らせは分かち合うためにあるからです。

イエスはかつて何度も、これから起こること、つまりご自分が殺されて復活すると、弟子たち（イエスによって特別に選ばれた人たち）に語っておられたのに、彼らはマリアのあかしを信じようとしませんでした——「しかし彼らは、イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを聞いても、信じなかった」（マコ 16：11）。なんと不思議なことでしょう。このように、イエスの弟子たちでさえすぐには信じなかったのですから、もしだれかが私たちの言葉をすぐに受け入れないとしても、私たちは驚くべきではありません。

「議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった」(使徒4:13)。

新約聖書時代の教会は、爆発的に成長しました。あの五旬祭の日には、3000人がバプテスマを受け(使徒2:41)、数週間後には、さらに数千人が教会に加わりました(同4:4)。権力者たちは、何が起きているのかをすぐに察知しました。この新約聖書時代の信者たち〔ペトロとヨハネ〕は、ずっとキリストとともにいて、人生を変えられたのです。彼らはキリストの恵みによってつくり変えられ、黙っていることなどできませんでした。

問3 使徒言行録4:1~20を読んでください。ここでどのようなことが起きましたか。権力者たちがペトロとヨハネを黙らせようとしたとき、どうなりましたか。2人はどのように応じましたか。

キリストによって新たにされたこの信者たちは、自分の体験談を語らずにはいられませんでした。大口をたたいていた漁師のペトロは、神の恵みによってつくり変えられました。かんしゃくを抑え切れずに雷の子らと呼ばれたヤコブとヨハネも、神の恵みによってつくり変えられました。疑い深いトマスも、神の恵みによってつくり変えられました。弟子たちも、初代教会の教会員1人ひとりも、話したい物語をそれぞれ持っており、黙っていられなかったのです。『キリストへの道』の中の力強い次の言葉に注目してください——「人は、ひとたびキリストのもとに来るや否や、イエスがいかに尊い友であるかをほかの人に知らせたいと望みます。人を救い、清める真理は、どうしても心のうちに秘めておくことができません」(『キリストへの道』改訂第3版文庫判111ページ)。

宗教指導者たちが使徒言行録4:16で口にした言葉にも注目してください。彼らは、しるし(奇跡)が行われたという事実を公の場で認めています。足をいやされた人が彼らの目の前に立っていたからです。このようなことがありながらも、彼らは考え方を変えようとしませんでした。しかしペトロとヨハネは、公然と抵抗されたにもかかわらず、自分たちのあかしをやめようとはしませんでした。

キリストを知ることと、キリストを伝えることの間には、どのようなつながりがありますか。個人的にキリストを知ることが、私たちが彼についてあかしすることができるために、なぜ不可欠なのですか。

使徒言行録 26 章を見ると、パウロがアグリッパ王の前に囚人として立っています。パウロはここで直接王に語りかけ、自分の個人的なあかしをします。イエスに従う者たちの迫害者であった頃の自分についてだけでなく、回心したあとのイエスのあかし人としての自分や、死者の復活の約束についても語りました（使徒 26：8）。

パウロがダマスコ途上で回心したとき、主は彼に、「わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである」（使徒 26：16）と言われました。私たちの信仰を伝えることは、いつも生き生きとした体験です。それは、これまでにキリストが私たちのためにしてくださったこと、今私たちの生活の中でしておられること、そしていつの日か私たちのために成し遂げてくださることについて話すことです。

あかしというのは、自分について話をするものではありません。それは、いつでもキリストについて話すことです。キリストは、私たちの罪を赦し、病をいやし、慈しみの冠を授け、良いもので満ち足らせてくださる神です（詩編 103：3～5）。あかしとは、キリストのすばらしい恵みに関する私たちの物語を単純に話すこと、すばらしい恵みの神と私たちが個人的に出会ったことの証言なのです。

問 4 | ヨハネの手紙 1：1～3 とガラテヤ 2：20 を比べてください。どんな共通点がありますか。ヨハネとパウロの経験は、どのようなところが似ていますか。

ヨハネとパウロは異なる人生経験をしましたが、いずれもイエスと個人的に出会っています。イエスとの彼らの経験は、過去のある時点で起こり、そこで終わってしまうような経験ではありませんでした。それは、イエスの愛を喜び、その真理の光の中を歩む継続的な日々の経験でした。

回心は、過去のものにすぎないのでしょうか。過去の回心の体験だけが大切だと思っている人たちについて、エレン・G・ホワイトは次のように述べています——「あたかも彼らは、一度宗教について知ったなら、日々、回心する必要がないかのような感覚だった。しかし私たちは、だれもが、毎日回心しなければならないのである」（『原稿集』第 4 巻 46 ページ、英文）。

あなたの過去の経験がどんなに力強く、劇的なものであったとしても、日々主とながり、毎日その存在、恵み深さ、力を感じることは、なぜ重要なのですか。安息日学校のクラスであなたの答えを発表してください。

アグリッパの前に立つパウロに、もう一度目を向けましょう。使徒パウロが前にしているこの人は、ユダヤの一連の王たち、マカベア家とヘロデ家の最後の王でした。アグリッパは、自分はユダヤ人だと公言していましたが、彼の心はローマ人でした（『SDA聖書注解』第6巻436ページ、英文）。年老いた使徒は、宣教の旅に疲れ、善悪の戦いで傷を負っていましたが、彼の心は神の愛にあふれ、その顔は神の憐れみで輝いていました。これまでの人生でどのようなことが起こり、どのような迫害や困難を経験してきたにせよ、彼は、神が憐れみ深い方であることをはっきり断言できました。

アグリッパは、皮肉っぽく、疑い深く、かたくなで、純粋な価値観に興味がありませんでした。それとは対照的に、パウロは信仰にあふれ、真理に熱心で、断固として正しいことを守りました。両者の違いは、これ以上際立たせようがありませんでした。パウロは裁判の中で発言を求め、アグリッパから許しを得ます。

問5 使徒言行録 26 : 1~32 を読んでください。アグリッパに向かって、パウロはどのようにあかしをしましたか。彼の言葉から、私たちは何を学ぶことができますか。

不愛想は心を閉じさせますが、好意は心を開きます。パウロはここで、アグリッパに対して信じられないほど丁重です。アグリッパのことを、「ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだ」（使徒 26:3）と言っています。それからパウロは、自分の回心の議論を始めます。

問6 使徒言行録 26 : 12~18 のパウロの回心の物語を読み、次に同 26 : 26 ~28 でそれがどのような影響をアグリッパに与えているか注目してください。アグリッパはなぜあのように答えたのだと、あなたは思いますか。パウロのあかしのどのようなところが彼に感銘を与えたのでしょうか。

イエスが自分の人生をどのように変えたのかというパウロのあかしは、神を信じない王に大きな衝撃を与えました。変えられた人生ほど、効果的なものではありません。本当に改心した人生のあかしは、ほかの人に驚くほどの影響を及ぼします。神を信じない王でさえ、恵みによってつくり変えられた人生に心を動かされるのです。たとえ私たちには、パウロのような劇的な物語がないとしても、イエスを知ることの意味、彼の血によってあがなわれることの意味を、ほかの人に語ることはできるはずです。

参考資料として、『患難から栄光へ』第41章「アグリッパ王大いに感銘す」を読んでください。

クリスチャン生活の核心部分は、イエスとの交わりであり、それが豊かで充実していれば、私たちはそれを人に伝えたいと思います。正しい教理は重要ですが、恵みと愛によってつくり変えられた人生の代わりにはなりません。エレン・G・ホワイトは、このことをわかりやすく述べています——「救い主は、たとえどんなに筋が通っていても、議論をもってしては固い心を溶かしたり、世俗と私欲のからを破ることはできないことを知っておられた。また、弟子たちが天来の賜物を受けなければならないことを知っておられた。また、道であり、真理であり、いのちである方をほんとうに知ることによって温められた心と、雄弁にされた唇から伝える時に、福音は、はじめて効果をあらわすこともごぞんじであった」（『希望への光』1367ページ、『患難から栄光へ』上巻25ページ）。

また、『各時代の希望』の中で、次のような説得力のある考えも記しています。「教理の単なるくりかえしでは何1つできない時に、キリストのすばらしい愛は心をとかし、これを従えるのである」（『希望への光』1113ページ、『各時代の希望』下巻376ページ）。

個人的なあかしをするというのは、彼らが神の言葉の中に見いだした真理をほかの人に納得させることだと思っている人たちがいます。み言葉の真理を適当な折に伝えることは重要ですが、私たちの個人的なあかしは、イエスから無償で与えられた永遠の命という賜物の中に自分が見いだした罪からの解放、平安、憐れみ、赦し、力、希望、喜びに、むしろ関わりがあるのです。

話し合いのための質問

- ① 安息日学校のクラスで、水曜日の最後の問いに対する答えを発表してください。なぜ主との日々の体験は、私たちのあかしにとってだけでなく、私たちの個人的な信仰にとっても重要なのですか。
- ② 言うまでもなく、力強いあかしは、効果的なあかしになりえます。同時に、信心深い生き方は、なぜ私たちのあかしの重要な一部なのですか。
- ③ 安息日学校のクラスで、あなたの個人的なあかしをしてください。キリストがあなたのためにしてくださったこと、キリストが現在のあなたにとってどのような意味を持っておられるのかについて語るのだということをお忘れなくしてください。イエスはあなたの人生をどのように変えてくださいますか。